

Jordan 代数の表現から得られる clan の双対 clan

中島 秀斗 (九大・数理)*1

野村 隆昭 (九大・数理)*2

一般に (V, Δ) を clan とし, V の内積は認容線型形式 s を用いて $\langle x|y \rangle = s(x \Delta y)$ で与えられているとする. このとき V に双線型な積 ∇ を

$$\langle x \nabla y|z \rangle = \langle y|x \Delta z \rangle \quad (x, y, z \in V)$$

により定義すると, 代数 (V, ∇) は clan になる. この clan を (V, Δ) の双対 clan と呼ぶ. 双対 clan に対応する等質錐は, 元の clan に対応する等質錐 Ω の内積 $\langle \cdot | \cdot \rangle$ に関する双対錐 Ω^* となる.

以下 V を Euclid 型の Jordan 代数, (φ, E) を V の自己共役表現とし, 直前の講演の用語, 記号を引き続き用いる. 特に (V_E^0, Δ) は Jordan 代数の表現から得られる clan であり, V_E^0 の元を $v = \lambda u + \xi + x$ ($\lambda \in \mathbb{R}, \xi \in E, x \in V$) のように表す. さらに V_E^0 上の線型形式 s^0 を Jordan 代数 V の trace 函数 $\text{tr}(x)$ を用いて $s^0(v) := \lambda + \text{tr}(x)$ で定義すると, s^0 は V_E^0 の認容線型形式になる. このとき s^0 により V_E^0 に入る双対 clan 積 ∇ は

$$v \nabla v' = (\lambda \lambda' + \langle \xi | \xi' \rangle_E) u + (\varphi(x)^* \xi' + \frac{1}{2} \lambda \xi' + \varphi(x') \xi) + x \nabla x'$$

となる. ただし $x \nabla x'$ は V における双対 clan の積である. (V_E^0, ∇) に対応する等質開凸錐を $(\Omega^0)^*$ と表す. V の対称錐を Ω とするとき, $(\Omega^0)^*$ は次の様に記述される.

命題 1.1. $(\Omega^0)^* = \{v = \lambda u + \xi + x \in V_E^0; x \in \Omega \text{ and } \lambda > \frac{1}{2} \langle \varphi(x)^{-1} \xi | \xi \rangle_E\}$.

V_E^0 の基底を, u, E の基底, V の基底, の順でとり, V の双対 clan 積 ∇ に関する右乗法作用素を R_x^∇ とすると, V_E^0 の双対 clan 積 ∇ の右乗法作用素 \tilde{R}_v^∇ は

$$\tilde{R}_v^\nabla = \begin{pmatrix} \lambda & \langle \cdot | \xi \rangle_E & 0 \\ \frac{1}{2} \xi & \varphi(x) & \varphi(\cdot)^* \xi \\ 0 & 0 & R_x^\nabla \end{pmatrix}$$

と表される. 一方, Jordan 代数 V の Jordan 枠 c_1, \dots, c_r の逆順 Jordan 枠 c_r, \dots, c_1 に付随する V の principal minors を $\Delta_1^*(x), \dots, \Delta_r^*(x)$ ($x \in V$) とする. これらは (V, ∇) に付随する基本相対不変式になっている. $\text{Det } R_x^\nabla$ の部分に三つ前の講演の定理を用い, $\varphi(x)$ の余因子作用素を ${}^{\text{co}}\varphi(x)$ で表すと

$$\text{Det } \tilde{R}_v^\nabla = \Delta_1^*(x)^d \cdots \Delta_{r-1}^*(x)^d \Delta_r^*(x) \left(\lambda \text{Det } \varphi(x) - \frac{1}{2} \langle {}^{\text{co}}\varphi(x) \xi | \xi \rangle_E \right)$$

を得る. この右辺の最後の因子は, $x \in V$ の Jordan 代数の元としての余因子を ${}^{\text{co}}x$ とし, $N = \dim E$ とおくと, 次のように因数分解される:

$$\lambda \text{Det } \varphi(x) - \frac{1}{2} \langle {}^{\text{co}}\varphi(x) \xi | \xi \rangle_E = (\det x)^{\frac{N}{r}-1} \left(\lambda \det x - \frac{1}{2} \langle \varphi({}^{\text{co}}x) \xi | \xi \rangle_E \right).$$

本研究では論文 [3] の最終版作成時に科研費 (課題番号:24540177) の助成を受けている.

2010 Mathematics Subject Classification: 17C50, 32A85

キーワード: Jordan algebras, relative invariants

*1 〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 九州大学 大学院数理学府

e-mail: h-nakashima@math.kyushu-u.ac.jp

*2 e-mail: tnomura@math.kyushu-u.ac.jp

等質錐に付随する基本相対不変式は、対応する clan の右乗法作用素の行列式の既約因子としてすべて現れるので、次の定理を得る。

定理 1.2. 等質錐 $(\Omega^0)^*$ に付随する基本相対不変式 $P_j^*(v)$ ($j = 1, \dots, r, r+1$) は次で与えられる:

$$\begin{cases} P_j^*(v) = \Delta_j^*(x) & (j = 1, \dots, r), \\ P_{r+1}^*(v) = \lambda \det x - \frac{1}{2} \langle \varphi({}^{\text{co}}x) \xi | \xi \rangle_E & (j = r+1). \end{cases}$$

以下 $V = \text{Herm}(r, \mathbb{K})$ のときに、 $P_j^*(v)$ のより具体的な表示を考える。まず (V, Δ) の双対 clan 積 ∇ は $x \nabla y = (\underline{x})^* y + y \underline{x}$ ($x, y \in V$) で与えられることに注意する。さらにこの双対 clan に付随する基本相対不変式 $\Delta_j^*(x)$ は右下からの j 次小行列式 $\det_{[j]}(x)$ ($x \in V; j = 1, \dots, r$) となる。また (φ, E) を Jordan 代数 V の自己共役表現とすると $E = \text{Mat}(r \times p, \mathbb{K})$ であり、この表現から得られる (V_E^0, Δ) は $\text{Herm}(r+p, \mathbb{K})$ の部分 clan として実現された。同様に (V_E^0, ∇) は $\text{Herm}(rp+1, \mathbb{K})$ の部分 clan として次のように実現される。

命題 1.3. 次の写像 $(V_E^0, \nabla) \rightarrow \text{Herm}(rp+1, \mathbb{K})$ は clan としての単射準同型写像である:

$$V_E^0 \ni \lambda u + \xi + x \mapsto \begin{pmatrix} \lambda & \frac{1}{\sqrt{2}} \iota(\xi)^* \\ \frac{1}{\sqrt{2}} \iota(\xi) & x \otimes I_p \end{pmatrix} \in \text{Herm}(rp+1).$$

ただし $\text{Herm}(rp+1, \mathbb{K})$ の clan 積は双対 clan 積 ∇ であり、写像 ι は縦ベクトル $\xi_j \in \mathbb{K}^p$ ($j = 1, \dots, r$) を用いて以下のように定義される E から \mathbb{K}^{rp} への同型写像である:

$$\iota: E \ni \xi = \begin{pmatrix} {}^t\xi_1 \\ \vdots \\ {}^t\xi_r \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} \xi_1 \\ \vdots \\ \xi_r \end{pmatrix} \in \mathbb{K}^{rp}.$$

この埋め込みを用いると、 V が Hermite 型のとき、 $(\Omega^0)^*$ に付随する基本相対不変式 $P_j^*(v)$ ($j = 1, \dots, r+1$) は

$$\begin{cases} P_j^*(v) = \det_{[j]}(x) & (j = 1, \dots, r), \\ P_{r+1}^*(v) = \lambda \det x - \frac{1}{2} \iota(\xi)^* ({}^{\text{co}}x \otimes I_p) \iota(\xi) & (j = r+1) \end{cases}$$

と表されることがわかる。文献 [2] ではこれの $\mathbb{K} = \mathbb{R}$ かつ $r = 2$ の場合が例として現れている。本稿で Jordan 代数の表現から出発して構成した等質錐 $(\Omega^0)^*$ は、それに付随する基本相対不変式 $P_j^*(v)$ が $\deg P_j^*(v) = j$ ($j = 1, \dots, r, r+1$) を満たしていて、文献 [2] の例を系統的に一般化したものになっている。

参考文献

- [1] J. Faraut and A. Korányi, Analysis on symmetric cones, Clarendon Press, Oxford, 1994.
- [2] H. Ishi and T. Nomura, Tube domain and an orbit of a complex triangular group, Math. Z., **259** (2008), 697–711.
- [3] H. Nakashima and T. Nomura, Clans defined by representations of Euclidean Jordan algebras and the associated basic relative invariants, Preprint, 38pp, 2012 (to appear in Kyushu J. Math.).